埼玉県退職校長会会報

題字・清水章夫
第159号
平成29年1月

① 巻頭言
③～ 支部別教育推進協議会
⑨ 関ブロ群馬大会
⑩ 第1回理事会報告
⑪～ 一人一言
⑰ 現退校長会役員研究協議会
⑱ 囲碁・ゴルフ大会
⑲ 長寿会員への寿詞の贈呈
⑳ 文芸・編集後記

家庭と学校と地域と

埼玉県退職校長会　副会長　神山　則幸

いじめや不登校、学級崩壊の状況が頻繁に起こり、平成12年に教育改革国民会議で、「危機に瀕する日本の教育」という言葉が使われた。現在は、「教育再生実行会議」から8回にわたり提言がなされている。将来を担う人材育成のための新たな教育の構築が喫緊の課題ということであろうが、今までの教育が否定されているわけではない。

「這えば立て、立てば歩めの親心」と言われるように、子どもは親の期待を一身に背負って生まれてくる。歩んだ後、親はどうすべきかが家庭教育としては大事なのである。しかし、時代とともに核家族化が進み、厳しかった父親は優しくなり、優しかった母親は教育ママ化していくなど、親の姿勢が変わってきている。今こそ「おじいちゃん」「おばあちゃん」の出番である。

家庭で育てられた子供たちはやがて学校へ通う。学校では「知・徳・体」のバランスのとれた児童の育成を学校目標としている。目標の具現化にあたっては、最大の教育環境である教員の資質向上が不可欠である。どこの学校でも校長を中心に様々な研修が行われている。そこで、退職校長がこれまでの経験を活かし、必要に応じて現職校長とともに考えていける協力体制づくりが必要となる。

地域では青少年育成団体の活動や町会行事、学校応援団など様々な形で家庭や学校を支援している。しかし近年、町会入会者の減少に歯止めがかからないという話を聞く。少子高齢化や、共働き家庭の増加などの要因があるとも聞いている。退職校長会の会員一人ひとりが、地域活動に積極的に参画し、持てる経験を生かして、地域の活性化に一役かってみてはいかがでしょうか。直接的な学校支援も大切、間接的な学校支援もまた大切である。

いずれにしても地域の子どもたちの健全育成の環境づくりは、家庭と学校と地域とがその役割を適切に果たすことであり、双方向の連携を強めていくことが大切である。

退職後の自由な時間を将来を担う子供たちのために使えたらと思う今日この頃である。

成形の功徳

児玉支部長　山下　武彦

10余年前、定年で退職するに当たり、37年にわたる教職の記録としてそれぞれの勤務校での想い出や「学級だより」「学校だより」等を纏めた冊子『護られ導かれ支えられて～私の教職卒業アルバム～』を自費出版した。単なる自己満足に過ぎないものではあったが、子や孫に私の生きた証の一端を伝えることができたように思う。

お仲間である本会会員の皆様にもそのようなことをされた方は多いと思うが、中でも俳句や短歌をたしなまれる方や美術の教師であった方の「作品集」を手にすると、親しみと羨望の気持ちで見開かせていただいたものである。

教頭や校長であった頃、巡り合わせの縁でその校の「周年記念誌」を編むことが何度かあった。原稿の依頼や取り纏めと校正、それに写真の選定など沢山の方々のお力をお借りして完成した箱入りの記念誌は、今では貴重な宝物である。

尊崇する森信三先生はその著『修身教授録』の中で次のように述べておられる。「すべて物事というものは、形を成さないことには、十分にその効果が現れないということです」また「物に形を与え、物を取りまとめておくということが、いかに大なる意味を持つものかということを、今さらのように感じるのであります」と。

私たち埼玉県退職校長会は『20周年記念誌』に続くその後の歩みを纏めた『50周年記念誌』を、編集委員の方々のご尽力と本部・支部等関係者のご協力により昨春刊行した。大変貴重な資料であり大切に保管するとともに、折に触れて見開き確認させて戴いている。

関連して思うのは、森先生がよく言われたもう一つのこと「自伝を残す」である。「人間は子孫に血を伝えた以上、わが子はもとより、少なくとも孫の代までは自分の一生の歩みを伝える義務がある。」

最近テレビで視る「ファミリーヒストリー」には及ばずとも、「自分がいかに多くの方々のお世話になって今日あるを得たか、自伝は一種の報恩録」になるとのことである。